

「宅ドリル便 for PT/OT」誤植のお詫び

2020年6月10日

「宅ドリル便 for PT/OT」のマルバツ問題の正解に誤りがございました。特に PT 第 49 回午後については、午後問 3 のマルバツ問題が抜けていたため、問 4 から問 50 まで多数の誤りがあり、皆様には大変ご迷惑をおかけし誠に申し訳ありません。

WEB システムに関しては対応済となっております。スマホアプリにつきましては申請に時間がかかることから、今しばらくお待ちいただけますようお願い申し上げます。(2020年6月10日現在)

このような事態を招きましたことを深くお詫び申し上げます。

今後はよりチェック体制を整え、正確なデータを提供できるよう努めてまいります。

【対象となる問題】

- ・ 第 43 回午後 (共通) : 問 46
- ・ 第 44 回午後 (共通) : 問 85
- ・ 第 49 回午後 (PT) : 問 4~18、21、23~31、33、36~43、45~50
- ・ 第 50 回午前 (PT) : 問 1

第 43 回午後 (共通)

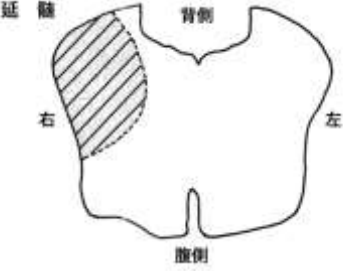
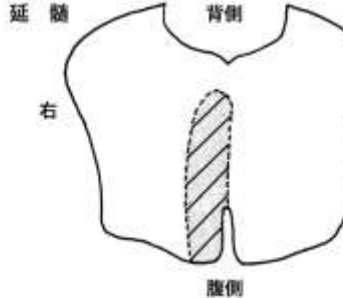
問	問題文	正解 (誤→正)
46	安静立位時の重心線は股関節の後方を通る。	×→○

第 44 回午後 (共通)

問	問題文	正解 (誤→正)
85	「頸部—伸展位」は脳卒中片麻痺急性期のポジショニングで正しい組合せである。	○→×

第 49 回午後 (PT)

問	問題文	正解 (誤→正)
4	65 歳の男性。右利き。左上下肢の脱力のため搬送された。頭部 MRA を示す。この患者に絵の模写を行わせると、図のように描いた。この患者に伴いやすい高次脳機能障害は左右失認である。	○→×

4	<p>65歳の男性。右利き。左上下肢の脱力のため搬送された。頭部 MRA を示す。この患者に絵の模写を行わせると、図のように描いた。この患者に伴いやすい高次脳機能障害は着衣障害である。</p>	× → ○
5	<p>58歳の男性。生来健康であったが、突然のめまいと歩行困難で救急搬送された。脳梗塞の診断で理学療法が開始された。理学療法の初期評価では、めまい、眼振とともに、右側には小脳性の運動失調、Horner 症候群および顔面の温痛覚障害がみられた。左側には上下肢の温痛覚障害がみられたが深部感覚は保たれていた。図は病巣である。</p> 	× → ○
5	<p>58歳の男性。生来健康であったが、突然のめまいと歩行困難で救急搬送された。脳梗塞の診断で理学療法が開始された。理学療法の初期評価では、めまい、眼振とともに、右側には小脳性の運動失調、Horner 症候群および顔面の温痛覚障害がみられた。左側には上下肢の温痛覚障害がみられたが深部感覚は保たれていた。図は病巣である。</p> 	○ → ×
6	<p>58歳の男性。生来健康であったが、突然のめまいと歩行困難で救急搬送された。脳梗塞の診断で理学療法が開始された。理学療法の初期評価では、めまい、眼振とともに、右側には小脳性の運動失調、Horner 症候群および顔面の温痛覚障害がみられた。左側には上下肢の温痛覚障害がみられたが深部感覚は保たれていた。この患者が立位をとったところ、不安定で突進するような現象(pulsion)がみられるために介助が必要であった。この現象がみられる方向は右側方である。</p>	× → ○
6	<p>58歳の男性。生来健康であったが、突然のめまいと歩行困難で救急搬送された。脳梗塞の診断で理学療法が開始された。理学療法の初期評価では、めまい、眼振とともに、右側には小脳性の運動失調、Horner 症候群および顔面の温痛覚障害が</p>	○ → ×

	<p>みられた。左側には上下肢の温痛覚障害がみられたが深部感覚は保たれていた。この患者が立位をとったところ、不安定で突進するような現象(pulsion)がみられるために介助が必要であった。この現象がみられる方向は左側方である。</p>	
7	<p>脳卒中片麻痺患者の麻痺側の足背屈可動域を測定した結果を表に示す。「分離運動の障害がある」は解釈で正しい。</p>	×→○
7	<p>脳卒中片麻痺患者の麻痺側の足背屈可動域を測定した結果を表に示す。「足の靭帯に疼痛がある」は解釈で正しい。</p>	○→×
8	<p>60歳の男性。Parkinson病。3年前に右手の振戦で発症し、2年前から左足と左手の振戦を認めている。最近、前かがみが強くなり、腹部が締めつけられるような感覚を生じることがある。独歩は可能。事務仕事を継続している。「毎日10分間の散歩」は外来時の指導で適切である。</p>	○→×
8	<p>60歳の男性。Parkinson病。3年前に右手の振戦で発症し、2年前から左足と左手の振戦を認めている。最近、前かがみが強くなり、腹部が締めつけられるような感覚を生じることがある。独歩は可能。事務仕事を継続している。「肩甲帯と体幹を大きく動かす運動」は外来時の指導で適切である。</p>	×→○
9	<p>健常児。最近、腹臥位にて図に示す姿勢をとるようになった。足底把握反射はこの月齢で残存している可能性が最も高い反射である。</p>	×→○
9	<p>健常児。最近、腹臥位にて図に示す姿勢をとるようになった。非対称性緊張性頸反射はこの月齢で残存している可能性が最も高い反射である。</p>	○→×
10	<p>25歳の男性。オートバイ運転中に乗用車と接触して頭部を強打し救急搬送され、外傷性脳損傷と診断された。理学療法が開始され2か月が経過した。FIMは92点。基本動作はすべて可能であるが、注意散漫になりやすい。Brunnstrom法ステージは上肢VI、下肢V、modified Ashworth scale1、歩行速度は0.9m/s、functional balance scaleは52点であった。現時点の理学療法で重点的に行う内容は二重課題練習である。</p>	×→○
10	<p>25歳の男性。オートバイ運転中に乗用車と接触して頭部を強打し救急搬送され、外傷性脳損傷と診断された。理学療法が開始され2か月が経過した。FIMは92点。基本動作はすべて可能であるが、注意散漫になりやすい。Brunnstrom法ステージは上肢VI、下肢V、modified Ashworth scale1、歩行速度は0.9m/s、functional balance scaleは52点であった。現時点の理学療法で重点的に行う内容は分離運動の促通である。</p>	○→×
11	<p>55歳の男性。筋萎縮性側索硬化症。1年前から通勤時に右足がつまずくようになった。最近では意識して膝を上にあげて歩行している。腰椎MRIでは病的所見はなく、針筋電図所見では両側の前脛骨筋に右側優位の神経原性変化を認めた。適切な対応は「立ち上がり運動を繰り返す」である。</p>	○→×

11	55歳の男性。筋萎縮性側索硬化症。1年前から通勤時に右足がつまずくようになった。最近では意識して膝を上にあげて歩行している。腰椎MRIでは病的所見はなく、針筋電図所見では両側の前脛骨筋に右側優位の神経原性変化を認めた。適切な対応は「右側プラスチック短下肢装具を装着する」である。	×→○
12	56歳の男性。数年前から頸椎椎間板ヘルニアを指摘されていた。昨日、自宅で転倒して突然に麻痺を呈した。頸髄損傷と診断され、主な損傷部位以下の機能はASIA機能障害尺度でBである。頸椎MRIを示す。「肩をすくめることができる」は正しい。	×→○
12	56歳の男性。数年前から頸椎椎間板ヘルニアを指摘されていた。昨日、自宅で転倒して突然に麻痺を呈した。頸髄損傷と診断され、主な損傷部位以下の機能はASIA機能障害尺度でBである。頸椎MRIを示す。「頸部を回旋することができない」は正しい。	○→×
13	58歳の女性。12年前発症の関節リウマチ。突然指が伸展できなくなり受診した。受診時の手の写真を示す。障害されたのは長橈側手根伸筋である。	○→×
13	58歳の女性。12年前発症の関節リウマチ。突然指が伸展できなくなり受診した。受診時の手の写真を示す。障害されたのは(総)指伸筋である。	×→○
14	25歳の男性。野球の試合で走塁中に右大腿後面に違和感と痛みとを生じ、近くの整形外科を受診した。大腿部エックス線写真では骨折を認めなかった。「アイシング」は現時点の対応で適切でない。	○→×
14	25歳の男性。野球の試合で走塁中に右大腿後面に違和感と痛みとを生じ、近くの整形外科を受診した。大腿部エックス線写真では骨折を認めなかった。「超音波照射」は現時点の対応で適切でない。	×→○
15	Thomasテスト(変法)による検査を図に示す。この検査で評価できないのは左腓腹筋の短縮である。	×→○
15	Thomasテスト(変法)による検査を図に示す。この検査で評価できないのは左ヒラメ筋の短縮である。	○→×
16	22歳の男性。身長170cm、体重70kg。外傷性頸髄損傷後6か月経過。MMTは、肘関節屈曲5、肘関節伸展2、手関節屈曲1、手関節伸展4、手内筋0、下肢0。ベッドへの移乗が自立したので、屋内で使用する車椅子を検討した。「14インチの駆動輪を使用する」は車椅子作製上の留意点で適切である。	○→×
16	22歳の男性。身長170cm、体重70kg。外傷性頸髄損傷後6か月経過。MMTは、肘関節屈曲5、肘関節伸展2、手関節屈曲1、手関節伸展4、手内筋0、下肢0。ベッドへの移乗が自立したので、屋内で使用する車椅子を検討した。「トグル式プレーキを使用する」は車椅子作製上の留意点で適切である。	×→○
16	22歳の男性。身長170cm、体重70kg。外傷性頸髄損傷後6か月経過。MMTは、肘関節屈曲5、肘関節伸展2、手関節屈曲1、手関節伸展4、手内筋0、下肢0。ベ	×→○

	<p>ッドへの移乗が自立したので、屋内で使用する車椅子を検討した。「足台をスイングアウト式にする」は車椅子作製上の留意点で適切である。</p>	
17	<p>85歳の女性。ADLに一部介助が必要だが、屋内歩行はつたい歩きで自立している。3か月前に机に手をつけて床から立ち上がろうとした際に転倒したが、骨折には至らなかった。「階段や浴室に滑り止めマットを敷く」は自宅の住環境に関する助言として適切である。</p>	×→○
17	<p>85歳の女性。ADLに一部介助が必要だが、屋内歩行はつたい歩きで自立している。3か月前に机に手をつけて床から立ち上がろうとした際に転倒したが、骨折には至らなかった。「トイレの開き戸をカーテンに変更する」は自宅の住環境に関する助言として適切である。</p>	○→×
17	<p>85歳の女性。ADLに一部介助が必要だが、屋内歩行はつたい歩きで自立している。3か月前に机に手をつけて床から立ち上がろうとした際に転倒したが、骨折には至らなかった。「必要な物は手の届く範囲の床上に置く」は自宅の住環境に関する助言として適切である。</p>	○→×
18	<p>87歳の女性。転倒による大腿骨近位部骨折に対する手術後。理学療法を行っているが、筋力増強の効果が不十分で全身の持久性も低下している。下肢の浮腫を認めたため主治医へ報告したところ、栄養障害はあるが内科的な併存症はないといわれた。理学療法を行う上で、「アルカリフォスファターゼ」「クレアチニン」「空腹時血糖」「アルブミン」「赤血球」の中で特に参考となる血液検査所見は「クレアチニン」である。</p>	○→×
18	<p>87歳の女性。転倒による大腿骨近位部骨折に対する手術後。理学療法を行っているが、筋力増強の効果が不十分で全身の持久性も低下している。下肢の浮腫を認めたため主治医へ報告したところ、栄養障害はあるが内科的な併存症はないといわれた。理学療法を行う上で、「アルカリフォスファターゼ」「クレアチニン」「空腹時血糖」「アルブミン」「赤血球」の中で特に参考となる血液検査所見は「アルブミン」である。</p>	×→○
21	<p>「肩内旋—尺骨」は、関節可動域測定法(日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会基準による)で部位・運動方向と移動軸の組合せで正しい。</p>	×→○
21	<p>「肘伸展—橈骨」は、関節可動域測定法(日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会基準による)で部位・運動方向と移動軸の組合せで正しい。</p>	×→○
21	<p>「手屈曲(掌屈)—第3中手骨」は、関節可動域測定法(日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会基準による)で部位・運動方向と移動軸の組合せで正しい。</p>	○→×
23	<p>「股関節屈曲位からの外転—下腿遠位部外側面」は Danielsらの徒手筋力テストにおける段階4の検査で、検査する運動と抵抗を加える部位の組合せで正しい。</p>	○→×

23	「股関節内転—大腿遠位部内側面」は Daniels らの徒手筋力テストにおける段階 4 の検査で、検査する運動と抵抗を加える部位の組合せで正しい。	×→○
24	「個々の筋の筋力が測定可能である」は Daniels らの徒手筋力テストで正しい。	○→×
25	「患側の手に冷感がみられる」は脳卒中後の肩手症候群について正しい。	○→×
25	「麻痺が重度の場合に発症しやすい」は脳卒中後の肩手症候群について正しい。	×→○
26	「安静時振戦は off 時に評価する」は Parkinson 病に対する UPDRS を用いた理学療法の評価の説明で正しい。	○→×
26	「着衣は on 時と off 時に分けて評価する」は Parkinson 病に対する UPDRS を用いた理学療法の評価の説明で正しい。	×→○
27	再燃を繰り返している多発性硬化症患者において、ステロイドパルス療法後に介助での座位が可能となり、理学療法が開始された。「座位バランスの安定化を促す」は適切である。	×→○
27	再燃を繰り返している多発性硬化症患者において、ステロイドパルス療法後に介助での座位が可能となり、理学療法が開始された。「自主練習として伝い歩きを指導する」は適切である。	○→×
28	Klapp 体操は眼振がみられる患者の体幹筋の協調運動障害に適応となる。	○→×
28	rhythmic stabilization は眼振がみられる患者の体幹筋の協調運動障害に適応となる。	×→○
29	6 歳までの脳性麻痺で最も多いタイプは痙直型である。	×→○
29	6 歳までの脳性麻痺で最も多いタイプはアテトーゼ型である。	○→×
30	上腕三頭筋は Zancolli の四肢麻痺上肢機能分類で基本的機能筋に指定されている。	○→×
30	上腕筋は Zancolli の四肢麻痺上肢機能分類で基本的機能筋に指定されている。	×→○
30	深指屈筋は Zancolli の四肢麻痺上肢機能分類で基本的機能筋に指定されている。	×→○
31	運動覚は前脊髄動脈症候群において損傷レベル以下で低下する感覚である。	○→×
31	温度覚は前脊髄動脈症候群において損傷レベル以下で低下する感覚である。	×→○
31	振動覚は前脊髄動脈症候群において損傷レベル以下で低下する感覚である。	○→×
33	「下肢の関節拘縮を生じやすい」は Duchenne 型筋ジストロフィーで正しい。	×→○
33	「閉塞性換気障害を生じやすい」は Duchenne 型筋ジストロフィーで正しい。	○→×
36	「副神経—肩甲骨挙上障害」は末梢神経障害における症状で正しい組合せである。	×→○
36	「橈骨神経—前腕回内障害」は末梢神経障害における症状で正しい組合せである。	○→×

36	「脛骨神経—足関節底屈障害」は末梢神経障害における症状で正しい組合せである。	×→○
37	過活動膀胱は「溢流性尿失禁」「過活動膀胱」「機能性尿失禁」「切迫性尿失禁」「腹圧性尿失禁」の中で、骨盤底筋体操の効果が最も期待される病態である。	○→×
38	「末梢性顔面神経麻痺の機能回復」は電気刺激療法の適応とならない。	×→○
38	「褥瘡の組織修復の促進」は電気刺激療法の適応とならない。	○→×
39	「断端荷重はできない」は Syme 切断で正しい。	○→×
39	「義足装着時の歩行能力は健常者とほぼ同等である」は Syme 切断で正しい。	×→○
40	「内側支柱の高さは会陰部から 2~3cm 下方とする」は、両側金属支柱付き長下肢装具の適合判定で正しい。	×→○
40	「下腿半月上縁の高さは腓骨頭から 2~3cm 下方とする」は、両側金属支柱付き長下肢装具の適合判定で正しい。	×→○
40	「足継手の高さは外果下端に合わせる」は、両側金属支柱付き長下肢装具の適合判定で正しい。	○→×
41	「座の奥行きは背面から膝窩までの長さから 10~15cm 引いた長さとする」は、標準型車椅子の採寸について正しい。	○→×
41	「背もたれの高さは座面から腋窩までの長さから 5~10cm 引いた高さとする」は、標準型車椅子の採寸について正しい。	×→○
42	「運動耐容能の改善を図ることができる」は、慢性閉塞性肺疾患における包括的呼吸リハビリテーションで正しい。	×→○
42	「吸気時に動作を行うように指導する」は、慢性閉塞性肺疾患における包括的呼吸リハビリテーションで正しい。	○→×
42	「栄養指導は含まない」は、慢性閉塞性肺疾患における包括的呼吸リハビリテーションで正しい。	○→×
43	「単神経障害を呈することが多い」は糖尿病性神経障害で正しい。	○→×
43	「アキレス腱反射が低下しやすい」は糖尿病性神経障害で正しい。	×→○
45	顎二腹筋は顎関節にある関節円板の動きに直接関係する筋である。	○→×
45	外側翼突筋は顎関節にある関節円板の動きに直接関係する筋である。	×→○
46	「体重心線は膝関節軸の前方を通る」は成人の静止立位で正しい。	×→○
46	「身長に対する体重心の相対的位置は小児より低い」は成人の静止立位で正しい。	×→○
46	「足関節にかかる重力のモーメントは底屈モーメントである」は成人の静止立位で正しい。	○→×
47	「特定のことができる能力を評価する」は、PEDI (pediatric evaluation of disability inventory)で誤っている。	○→×

48	「Trail making test (TMT)」は、値が大きい場合に機能が良好であると判断できる。	○→×
48	「Cross test による軌跡長」は、値が大きい場合に機能が良好であると判断できる。	×→○
48	「Functional balance scale」は、値が大きい場合に機能が良好であると判断できる。	×→○
49	2つのバランス練習の効果を比較するため、オッズ比の95%信頼区間を計算したところ、0.65～0.89の値が得られた。効果が有意である。	×→○
49	2つのバランス練習の効果を比較するため、オッズ比の95%信頼区間を計算したところ、0.89～1.39の値が得られた。効果が有意である。	○→×
49	2つのバランス練習の効果を比較するため、オッズ比の95%信頼区間を計算したところ、1.39～5.67の値が得られた。効果が有意である。	×→○
49	2つのバランス練習の効果を比較するため、オッズ比の95%信頼区間を計算したところ、0.65～5.67の値が得られた。効果が有意である。	○→×
50	理学療法士でなくなった後には守秘義務も解除される。	○→×
50	理学療法士名簿への登録者に理学療法士免許が与えられる。	×→○
50	理学療法士国家試験合格者は自動的に理学療法士名簿に登録される。	○→×

第50回午前 (PT)

問	問題文	正解 (誤→正)
1	股屈曲は関節可動域測定法（日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会基準による）で正しい。	×→○
1	足背屈は関節可動域測定法（日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会基準による）で正しい。	○→×
1	股内旋は関節可動域測定法（日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会基準による）で正しい。	×→○